

幾多平治物語

三十一

太政官文庫			
	八	和	
	五	書	
六	三	類	
一	〇		
二	號		
架	函		
冊			

內閣文庫			
	八	和	
	五	書	
一	三	類	
七	〇		
函	號		
二	冊		
架			

(大)

內閣文庫	
番號	和 8530
冊數	6(6)
函號	167 31



克明館藏書

克明館
文庫印

經宗惟方遠流并被召返事

カハル所ニ院ハ顯長卿ノ宿所ニ御座アリケル

カ。常ハ御棧敷ニ出サセ給ヒテ。行人ノ往來ヲ御

覽セラレテ慰マセ給ヒケルニ。二月二十日ノ比。

内裏ヨリノ御使トテ打ツケテケリ

見正^見皇^皇御憤深クシテ。清盛ヲ召レ。主上ハ幼ク

大^大レ^レ車^車セハ。是程ノ御計ヒ有ヘキトモ覺ス。是併

經宗惟方カ所爲ト思召イマシメテ進ラセヨト

仰ケレハ。畏テ。一年保元ノ亂ニ親類ヲ離レテ御

後醍醐天皇御紀

卷之二

三十一

方ニ參テ忠ヲ致候キ。去年一カヲ以テ凶徒ヲ誅戮仕リ。一命ヲ輕シテ君ヲ位ニ即進ラセ候。幾度ナリトモ院宣敕定ニコソ從候ハンスレトテ。應テ官軍ヲ差遣シ。經宗惟方ノ宿所ニ押寄タレハ。新大納言ノ許ニハ。雅樂助通信前武者所信安ト云者二人討死シテケリ。サレ共兩人共ニ別事ナク召捕テ。御壺ノ内ニ引居タリ。帝王編年記云。永曆元年二月二十日。上皇御幸内裏。於近邊召取權大納言經宗。參議惟方等之間。禁中有鬪亂事。百練鈔云。二月二十日。院仰清盛。搦召經宗。惟方於禁裏中。一代要記云。二月二十日夜。於八條内裏。經宗惟方被搦了。既二

死罪ニ定リケルヲ。法性寺大殿忠昔嗟峨。天皇弘仁元年九月ニ。右兵衛督藤原仲成ヲ誅セラレヨリ。去保元元年迄帝二十五代。年紀三百四十七年カノ間。死セル者二度歸ラス不便也トテ。死罪ヲ停ラレタリシヲ。後白河院御宇ニ。少納言入道信西執權ノ時。始テ申行タリシカ。誅仲成以來。停死罪等。詳見保元物中二年ヲ歷テ。去年大亂起リ。其身聽テ誅セラレヌ。懼レクコソ侍レ。公卿ノ死罪如何アルヘカラシ。其上國ニ死罪ヲ行ヘハ。海内ニ謀反ノ者

絶スト申セハ杉原本云。其上外記ノ記録ニモ。左近少監ヲ禁所ニ射殺
 ノ首ヲ劔ラレニ事如何候ラン云々正シク公卿死罪一等ヲ宥
 テ。遠流ニヤ處セラレント申サセ給ヘハ。充大殿
 ノ仰然ルヘント。諸卿同ニ申サレシカハ自段首至此。京師鎌倉半井新大納言經宗ヲハ阿波國
 三本並無

○京師本杉原本鎌倉本半井本並云。經宗ハ阿波國へ流サル。一首讀テ君へ進ラセケリ
 落タキツ京師本杉原本。落タキル云々。水ノ泡ト云々。半井本。落キタル云々。
 モ消京師杉原本半井本作成モセテ。ウキニ絶半井本也

又身コソツラケレ

ヤカテ赦免アリ。云々寶物集云。教長宰相東ノ方へ流サレケルニ。カク

ソ讀ケル。落タキツ水ノ淡トハ流ルレト。ウキニ消セヌ身ヲイカニセ云々。按。經宗歌似。教

長歌蓋誤傳乎。可疑。經宗配流之時作歌他無所見

別當惟方ヲハ長門國京師杉原鎌倉半井本並云。長門名田濱へソ流

サレケル。官外記ノ記録ニハ。令左近將監射殺仲

成於禁所ト註シタレハ。正シク頸ヲ劔ラレケニ

事ハ猶久シクヤ成ヌラン官外記云々。至此。唯出杉原本。爲忠通言註干

前 去程ニ彼人々ノ隱謀次第ニ顯レテ。君モ罪ナ

卷三

キ由聞召レケレハ。信西子共皆以召返サレ。

○愚管鈔云。二條院當今ニテオハシマスハ。其按

治元年 十二月二十九日ニ。美福門院ノ御所八條

殿へ行幸ナリテ渡ラセ給フ。後白河院ヲハ其

正月六日。八條堀河ノ顯長卿カ家ニオハシマ

サセケルニ。其家ニハ棧敷ノ有ケルニテ。大路

御覽シテ。下スナト召寄ラレケレハ。經宗惟方

ナト沙汰シテ。堀河ノ板ニテ棧敷ヲ外ヨリム

スムスト打ツケテケリ。カヤウノ事共ニテ。大

方此二人シテ世ヲハ院ニシラセ進ラセシ。内

ノ御沙汰ニテ有ヘシト云ケルヲ聞召テ。院ハ

清盛ヲ召テ。我世ニアリナシハ。此惟方經宗ニ

アリ。是ヲ思フ程イマシメテ進ラセヨトナク

ナク仰アリケレハ。其御前ニハ法性寺殿モオ

ハシマシケルトカヤ。清盛又思様共モアリケ

レ。忠景爲長ト云二人ノ郎等シテ。此二人ヲ擧

捕テ。陣頭ニ御幸ナシテ。御車ノ前ニ引スエテ

オメカセテ進ラセタリケルナト。世ニハ沙汰

シキ。其有様ハマカマカシケレハ書ツクヘカ
 ラス。ヤカテ經宗ヲハ阿波國。惟方ヲハ長門國
 へ流シテケリ。信西カ子共ハ又數ヲ盡シテ召
 返シテケリ。此等擲ル按經宗惟方事ハ永曆元年二
 月二十日ノ事也。此等流シケル時。義朝カ子ノ
 頼朝ヲハ。伊豆國へ同シク流シヤリテケリ。同
 三月十一日エソ此流刑トモハ行ハレケル云々
 御政ニ附テ仰合ラル、方ナキ儘ニ。彼禪門信西ヲ
 ソ忍ハセ給ヒケル。師仲卿モ終ニ遁ル、所ナク

レテ。播磨中將成憲ノ配所室、八島へソ遣サレケ
 ル。御政云々至此。京師杉原鎌倉半井本並無伏見源中納言三河八橋
 ヲ渡ルトテ。

○夢ニタニ角テ三河ノ八橋ヲ渡ルヘシトハ思ハサリシ
 ト讀レタリシヲ。上皇聞召テ哀ニ思召レケレハ。
 召返セトソ仰ナリケル。誠ニ詠歌ノ徳ナルベシ
 ○京師本杉原本鎌倉本半井本並云。師仲ハ三河
 八橋へ流サレケリ。不破關ヲ過給フトテ。關屋
 ノ柱ニ。一首角ソ書レケル。

東路ヲ西へ公レ行人見レハ浦山シキハ此世ノミカハ

鎌倉本云此世ナリケリ

八橋ニ著給ヒテ角ソ思ヒ續ラル

夢ニタニ思ハサリシニ川ナル今日八橋ヲ渡ルヘトハ

是モ幾程ナク赦免アリ又云々

○千載集載師仲歌云下野國ニマカリケル時尾

張國ナルミト云所ニテ讀侍リケル

オホツカナイカニナルミノ果ナラシ行衛モシラ又旅ノ悲シキ

○按本書諸本所載師仲歌他無所見未知孰是公

卿補任云源師仲平治元年十二月二十八日解
官永曆元年三月十一日配流下野仁安元年三
月二十九日召返云々今據此說所謂流師仲於
三河者誤也

其後新大納言經宗モ阿波國ヨリ召返サレテ右

大臣ニナル按公卿補任經宗永曆元年二月二十

八日解官去二十日有事三月配流阿

波國應保二年召返長寛二年任右大臣又人アハ

按公卿補任一云流經宗於河内國恐訛
ノ大臣トソ申ケル又大官左大臣伊通公世ニ住
ハ興アル事ヲ聞物哉昔コソ忝大臣在ケンナレ

忝大臣。蓋謂吉備真吉備。按公卿補任。真今粟大臣

出來タリ。イツカ又稗大臣出來ランスラント笑

ハレケリ。大饗行ハルヘカリケルニ尊者ニ此左

大臣請シ奉リケレハ。使者ノ聞ヲモ憚ラス。粟大

臣上テ旅籠振舞セラル、ナ。伊通ハ得參ラシト

ソ申サレケル。別當入道惟ハ御憤深クシテ召返

サル間敷由聞ヘケレハ。心細クヤ思ハレケシ。故

郷へ一首ノ歌ヲソ送ラレケル。大饗以下至此。京師杉原鎌倉半井

四本不載。唯云惟方一首獻セラレケリ。云々

此瀨ニモ沈ムト聞ハ淚河。流レシヨリモヌル、袖哉

ト讀タリシヲ按千載集載此歌。詞書云。遠キ國ニ

事ナヲリテノホルト聞ヘケル時。其ウチニ漏ケ

リト聞テ。人ノ許ニ遣ハシケル。云々。著聞集十訓

抄竝載此歌云。古卿ヘオクシタリケルヲ。法皇

傳ヘ聞召テ哀トオホシテ。サレモ罪重ク思召ケ

レト。此歌ニヨリテ召聞人哀ヲ催シ。君モ感シ思

返サレニケリ。云々。救免ヲ蒙テ上洛セラレケルト

召レケレハ。終ニ救免ヲ蒙テ上洛セラレケルト

也。按公卿補任。惟方永曆元年二月二十八日解官。去二十日有事。三月配流。即日配流以前出家。法名寂信。又按愚管抄。惟方永萬二年三月救歸。

頼朝遠流 附 盛安夢合事

サテモ頼朝ハ伊豆國へ流サレケレハ。池殿兵衛、
佐ヲ召シテ泣々宣ケルハ。昨日マテモ御事故ニ
心ヲ碎多ツルカ。配所定リテ流サレ給フヘキ也。尼
ハ若ワカキヨリ慈悲深キ者ニテ。多クノ者共申助タ
リシカトモ。今ハ懸ル老尼ノ申事叶フヘシトモ
覺サリシカ。左馬頭盛重ノ能申サレテ。既ニ命ノ助
リ給フ事ノ嬉シサヨ。今生ノ喜ヨロコ是ニ過スタル事ナ
レト口説給ヘハ。頼朝御息ニ依テ甲斐ナキ命ヲ
助エレ進ラセ候事。生々世々ニモ報シ盡シ難ク

コソ候ヘ。其ニ附テ遙々ト罷下侍ラニ道スカラ。
我方様ノ者一人モ候ハ子ハ。如何仕ルヘキト申
サレケレハ。誠ニソレモイタハシ。親祖父ノ時ヨ
リ召仕ハル、者モ世ニ恐テコソ隱居テコソ侍
ラヌ。今ハ宥オホラレヌト披露ヲナシテ御覽セヨカ
シト計ハレシカハ。聽テ其由風聞スルニ侍少少出
來タリ。彼侍共同心ニ申ケルハ。今ハ御出家ノ事
ヲ申サレテ御下向候ハ、御心安候ナニ。池殿モ
能思召。平家ノ人々モ然ルヘシトコソ存セラレ

候ハメト申勸ケルニ。續續源五盛安盛安名、字、京師杉原鎌倉

半井、四本異、註、于、下、計、ソ、耳、ニ、私、語、申、ケル、ハ、如、何、申、候、ト、モ。

御髮惜カミ、オシニセオハシニセ。君ノ助ラセ給フ事直事

ニ非ス。八幡大菩薩ノ御計ト覺候ト申セハ。打領ウチ、ウケ

給ケリ。御出家アレト云ニモ。ナ成給ソト云ニモ。

共ニ音モシ給ハヌ心ノ中コソ懼シケレ。永曆元

年三月二十日岡崎本作、十一日、爲、是、下、幼、之、頼、朝、被、流、公、卿、補、任、説、既、註、于、前。既

ニ伊豆國へ下ラレケレハ。池禪尼へ暇申ニ參ラ

レケリ。禪尼熟御覽ニテ。不思議ノ命ヲ助奉ル志

思知給ハハ。尼カ言葉ノ末ヲ少モ違へス。弓箭太

刀刀。狩漁ナト云事耳ニモ聞入給フヘカラス。人

ノ口ハサカナキ物ナレハ。御身モ二度事ニ遭ア、ヒニ

ニモ重カサ、ミテ憂耳聞セ給フナ、ト細コ、クト宣へハ。頼

朝ハ今年十四ナレハ。云ハ幼稚ナレトモ。人ノ志

ノ眞實ナルヲ思知テ。涙ニ咽袖モシホル計ニテ

オハシケルカ。良有テ父母ニ後レ候テ後ハ。哀ヲ

カクヘキ人モ侍ラヌニ。懇コ、ロノ御志有難クコソ候

ヘトテ頻ヒ、クニ泣沈給へハ。禪尼モ誠ニ左コソト心

中推量オレハカラレテ。人ハ能親ノ孝養志深キカ冥加モ
アリ。命モ存オカラフヘキ事ニテ有ソトヨ。經ヲモ讀念
佛ヲモ申テ。父母ノ後世ヲ弔給フヘシ。尼ハ子ト
思テ加様ニモ申也。其故ハ尼カ子ニ右馬助家盛
トテ候シソトヨ。ソレカ面影ニ能似給タレハ。最
惜オレク思フ也。都ステ眉目貌心様人ニ勝スレテ。鳥羽院
ニ召仕テ御覺ヨカリシカ。此大貳殿清盛イマ夕中
務少輔據公卿補任。少輔當作大輔ト申シ時。祇園社ニテ事ヲ
シ出シ。社人ノ訴ウタガハシアリシカハ。山門大衆舉テ。流罪

セラレヨト公家ニ申シカ共。君抱カヘ仰ラレシヲ
以上山門訴。台記等説出。弟家盛サ、ヘナリトテ。
于下。以下家盛事無所考。弟家盛サ、ヘナリトテ。
咒咀スルト聞ヘシカ。誠ニ山王ノ御靈ニヤ。二十
三ノ年失侍シ也。甲斐ナキ命堪タカテ在ヘキトモ覺
サリシカ。早十一年ニ成侍ケルソヤ。

○按ス台記又安三年六月十五日條云。人傳。今夕祇
園所司與忠盛朝臣、郎等鬪所司蒙創。矢中神殿
云々。按一代要記。歷代皇紀。祇園二十八日條云。
鬪諍為六月十六日事。恐誤。
延曆寺衆徒動神輿下向。按神輿下洛。帝王編年
記。百練鈔。日時與此同。

請流忠盛清盛等朝臣依祇園事也法皇詔檢非違使

禦之臨晚詔衆徒曰三日之内許所請者衆即歸

按此間數議忠盛清盛罪今畧之七月二十四日法皇敕云清盛朝

臣可贖銅者云々二十七日條云傳聞今日公家

奉幣於祇園社謝去月十五日鬪亂之事云々

何事ニ附テモ思出サヌ時モナキニ御事サヘ打

添テ涙ヲ流シ心ヲ盡シツルニ先嬉敷コソ侍ヘ

御身ハ行末遙也尼ハ明日ヲモ知ヌ身ナレハ餘

波コソ惜ク侍ヘト心苦シケニ打敷給ヘハ佐殿

モマヤカナル志ノ程ヲ思フニモ如何シテ此

恩ヲ報セントモ覺ヌ終夜泣コソ明サシケレ三

月二十日岡崎本作曉池殿ヲ出テ東路遙ニ下ラ

レケリ郎等少ク在シモ皆留ラレテ僅三四人コ

ソ具シタリシカ盛安モ大津迄トテ馬鞍尋常ニ

シテ供シタリケルニ佐殿ハ餘所人ノ流サルハ

ハ大ナル歎ナルカ頼朝カ流罪ハ希代ノ悅也ト

ソ宣ケルサレトモ内ノ藏人ニテモ有シカハ雲

上ノ交モ忌難シ后宮宮司ニテモ侍シカハ其餘

波モ惜カリキ。親ニモアラヌ池禪尼ノ情ヲ懸給
 フニモ別奉レハ。袂ノ乾ク隙ソナキ。越鳥南枝ニ
 巢ヲカケ。胡馬北風ニ嘶ケルモ。生土ヲ思フ故ソ
 カシ。東平王ト云者ノ旅ノ空ニテ失ケルカ。墓ノ
 上ナル草モ木モ故郷ノ方ヘソ靡ケル。生ヲカヌ
 テノ後ニテモ。生土ハ忘ヌ習ナルカ。追立ノ檢使
 青侍季通粟田口ヨリ次第ニ路次ニ玩物ヲ奪取
 テ狼藉殊ニ甚シ。盛安モ大津ニテト申タリシカ。
 人々留リヌル上勢多ニハ橋モ無テ舟ニテ向ノ

地へ渡給へハ。旁心苦シクテ打送奉ル處ニ。社ノ
 見ヘケルヲ如何ナル神ソト問給へハ。武部明神
 ト申。佐殿サヲハ今夜ハ此御前ニ通夜シテ。行路
 ノ祈ヲモ申サントテ。社壇ニソ留リ給ヒケル自
 首至此京師杉原鎌倉半井本並異別出下
 ○京師本杉原本鎌倉本半井本並云。頼朝伊豆國
 蛭島へ流サルヘシト定ラル。池殿宗清カ許へ
 頼朝具シテ參レト宣。宗清佐殿ヲ具シテ參。池
 殿頼朝ヲ近ク呼寄。姿ヲツククト見實ニ家盛

カ姿ニ少モ違ハス。京都邊ニ置テ。家盛カ形見
 ニ常ニ呼寄見テ慰ハヤ。遙々ト伊豆國ニテ下
 サニ事コソウタテケレ。和殿ヲハ家盛ト思ヒ。
 春秋ノ衣裳ハ一年ニ二度下スヘシ。尼ヲハ母
 ト思ヒ空シクナラハ後世ヲモ弔フヘシ。又伊
 豆國ハ鹿多キ處ニテ。常ニ國人寄合狩スル處
 ソ。人ト寄合狩ナトシテ。流人ノ思様ニ振舞ト
 テ國人ニ訟ラレ。二度憂目見スヘカラスト宣
 ヘハ。兵衛佐殿畏テ争カ左様ノ振舞候ヘキ。髪

ヲモ截父ノ後世ヲモ弔ハヤトコソ存候ヘト
 申ケレハ。能申者哉トテ池殿涙ヲ流サレケリ。
 疾々ト申セハ。サラハ御暇申トテ泣々出ラレ
 ナル。京師杉原半井本並云同三月十五粟田口
 ニ駒ヲ駐テ都ノ名残ヲソ惜ミレケル。人ハ流
 サル、ヲ歎ケトモ。此兵衛佐殿ハ悦也トソ皆
 人申ケル。サハ程ニ頼朝流サレ給フヲイサヤ
 見ントテ。京中邊土ノ上下。大津浦マテ市ヲナ
 シケルカ。人皆頼朝ヲ見テ。眼サレコツカエ。人

ニカハル所アリ。此人ヲ伊豆國ニ流シ置ハ千
里野邊ニ虎ノ子ヲ放ツニ異ナラス。哀未ノ世
ニ如何ナル事カアラント私語ケル。宗清名残
ヲ惜奉リテ打送申程ニ。佐殿勢多橋ヲ過給フ
トテ。アレニ見ユル森ハ如何ナル處ソト宣ヘ
ハ。建部宮トテ八幡ヲ祝進ラセテ候ト申セハ。
サラハ今夜通夜シ。暇申テ下ラハヤト宣ヘハ。
宗清申ケルハ。頼朝ヨソ流サレケルカ。宿ニハ
著スシテ山林ニ留リケルヨト平家ニ聞召レ

ハ。如何候ハント申セ共。氏ノ御神ニ暇申サシ
ハ。何カ苦シカルヘキト宣ケレハ。建部宮ニ入
奉リ。頼朝御社ニ通夜シテ。南無八幡大菩薩願
クハ今一度頼朝ヲ都ヘ返レ入給ヘト祈給フ
此下鎌倉杉原半井。爰ニカウケツノ源五守康
三本間異別出于下。ト云者アリ。義朝ノ郎等ニテアリシカ。傍ニ忍
居テ。常ニ兵衛佐殿オハシケル所ヘ參慰メ奉
リケル程ニ。老母尼公病附テ限也。シカ共。佐殿
流サレシカハ送ケルカ。其夜ハ御供シテ通夜

シタリ。夜半許ニ夢想アリ。人定シツリテ後頼朝ノ御
傍ムへ参リ。サ、ヤキ事ヲソ申ケル。今度伊豆國
ニオハシ候トモ。御出家アルマシキ由ヲ申候
シハ。全守ツタウ康カ言葉ニテ候ハス。八幡大菩薩ノ
御託宣候。其故ハ都ニテ不思議ノ夢想ヲ蒙ル。
云々。此下與本
書粗同
夜更人定テ盛安申ケルハ。都ニテ御出家然ルハ
カラサル由申候シハ。不思議ノ夢想ヲ蒙タリシ
故也。君御淨衣ニテ。八幡へ御参候テ大床ニマシ

ス。盛安御供ニテ數多オホクノ勢オホキノ上ニ祠候シタリ
シニ。十二三許ナル童子。弓箭ヲ抱イタテ大床ニ立セ
給タヒ。義朝カ弓胡ヤチ箆フ召テ参テ候ト申サレシカハ。
御寶殿ノ内ヨリ。ケタカキ御聲ニテ。深ク納置オホメヲケ終
ニハ頼朝ニ給ハニスルソ。是頼朝ニクハセヨト
仰ラルレハ。天童物ヲ持テ御前ニ差置セ給フ。何
ヤラント見奉レハ。打ウチ鮑アヒト云物也。君恐テ左右ナ
クニイラサリシヲ。其夕ヘヨト仰スル。數カヘテ御
覽セシカハ。六十六本アリ。被カ鮑アヒヲ兩方ノ御手ニ

卷之三
台物語

テ押握テ。太キ所ヲ三口ニ井リテ。小キ所ヲ盛安
ニ投給ヒシヲ。取テ懷中スルト見テ。打驚キ存候
レハ此上有脱句。以テ異本補之。故殿コソ一旦朝敵ト成セ給ヘ
トモ。御弓胡箠八幡ノ御寶殿ニ納置レ。終ニハ君
ニ給ハニスル也。又打鮑六十六本ニ井リシハ。六
十六箇國ヲ打召レ候ハニスルト合申テ候ツト
申セハ。其返事ヲハシ給ハテ。イサセメテ鏡ニテ
ト宣ヘハ。何クニテモ御供仕ラント存候ヘトモ。
八十二餘ル老母相勞ル事候ヘハ。今日明日ヲモ

知難シ。如何ニモ見成候ハ。應テ參ラント申テ
候ヘトモ。人ノナサニコソ角ハ仰候ラメ何ク迄モ云々
至此京師本不載 母ノ事ハ兎モ角モ侍レ。伊豆ニテ御供
仕ラント申セハ。其ハ思ヒモ寄ス。志ハサル事ナ
レトモ。汝カ母ノ歎カニ事。併我僻事ナルヘシ京師
本云。孝ノ志ヲ空レクセハ。佛神ニ背クヘシ。冥慮
ニ違ヒ頼朝カ爲然ルヘカラスト。互ニ名残ヲ惜
ル。都ヘ上トテ。母如何ニモ成ナニ後參ヘシトテ
再三止メ給ヘハ。カナク泣々都ヘ上ケリ
○鎌倉本杉原本半井本竝云。爰ニ續。續源五盛泰

額瀨。鎌倉本作上野。半井本作上總。ト云者アリ

鎌倉本半井本盛泰作守康。下飲之。云々。此間與前所載京師本同。佐殿流サレレカハ。名残ッ惜

三。都ニテハ粟田口ニテト思。粟田口ニテハセ

メテ關山大津ニテト思。打送是ニテ御供申テ。

其夜建部ニ通夜シタリ。夜半許ニ夢想ヲ蒙リ。

人定テ後頼朝ノ御傍ヘ參リ私語ケルハ。只今

不思議ノ夢想ヲ蒙候。八幡ヘ參詣仕候ヘハ。御

殿ノ内ヨリ。頼朝カ弓矢ハ何方ニアルソト御

尋候ヘハ。是候トテ童子二人弓矢ヲ持テ參ッ

ルヲ深ク納ヲケ。期カアラニソ。其時頼朝ニタ

ブヘシト仰ラレツレハ。御殿ニ深ク納置レ候

キ。其後君白キ御直垂ニテ參給。庭上ニ畏リ御

渡候ツレハ。銀ノ折敷ニ打鮑ヲ六十七八本程

置給ヒ。自御手ニテクハ頼朝タニハレトテ。御

簾ノ内ヨリ押出サセ給ヒツルヲ。君參給ヒ。此打

鮑ヲツクトキコシメシツルカ。僅一本許残

シ給。クハ盛泰タニハレトテ投出給ヒツルヲ

盛泰給リ。食ストモ覺ス。懷中ストモ覺スレテ

夢サメ又。一定君御代ニ出給ヒヌト覺候間。カ
ニヘテカニヘテ伊豆國へ御下著候トモ。御出
家ハレ候ナト申。佐殿人ヤ聞ラント思召。返事
ヲハレ給ハス。打領打領ソレ給ケル。夜明レハ
大菩薩ニ暇申出給。盛泰今日計ハ御供申度候
ヘトモ。老母ノ重病覺束ナク候トテ。暇申都へ
歸ケリ。彌平兵衛宗清ハ篠原ニテ打送來方行
末ノ事共能ク申置都へ歸ケレハ。佐殿斜ナラ
ス悦名残惜ケニソ見へ給ヒケル。程ナク伊豆

國ニ著ハ。蛭島ニ置奉リ。伊東北條ニ守護ニ奉
ルヘキ由申置。官人都へ上リケリ。云々。以上三
此以下唯京師
岡崎二本耳。

兵衛佐殿ハ尾張國熱田大宮司季範カ女ノ腹也。
男子二人京師本坊門女子一人ソオハレケル。女
子ハ後藤兵衛實基養君ニレテ都ニ隱ニ置ケリ。
今一人ノ男子ハ駿河國ニ香貫ト云者擲出シテ
平家へ獻レハ。希義ト云名ヲツケテ。土佐國氣良
ト云所へ流サレテオハレケレハ。氣良冠者トソ

申ケル。系圖云。希義號鎌田冠者。又號土左冠者。平家物語長門本與此異也。出于頼朝舉義兵。

○京師本云。男子ハ駿河國カツラト云所ニアリ

ケルヲ。母方ノ舅木工頭トモタ、ト云者、捕テ

平家へ獻ル。名字ナクテハ遠流ノ習ナレトテ。

希義ト各ツケ。土左國氣良ト云所ニ流カレ。其

後ハ氣良冠者トソ申ケル。云々。

兵衛佐ハ伊豆國。兄弟東西へ別行。宿業ノ程コノ

悲シケレ。

牛若奥州下向事

唯京師本岡崎本有。按此下至大尾悉係于盛衰記平家

物語。因今并考其大柴而詳參考盛衰記

サテモ常磐ヲハ清盛最愛シテ。近所ニ取居テ通

ハレケルトソ聞ヘシ。サレハ其腹ノ男子三人流

罪ヲモ遁レテ。兄今若ハ醍醐ニ登リ出家シテ。禪

師公全濟トソ申ケル。希代ノ荒者ニテ惡禪師ト

云ケリ。全濟。按系圖作全中乙若ハ八條宮親王。後

白河帝皇子。天王ニ候テ。卿公圓濟ト名来テ。坊官

法師ニテソオハシケル。圓濟系圖作圓成。而云配於奥州柴田。赦歸之後。住

於尾張愛智云々。按圓成被流者餘弟牛若八鞍馬

寺東光坊阿闍梨蓮忍岡崎本云東光坊阿闍梨

忍作圓忍京師本又弟子禪林房阿闍梨覺日作覺

異見于下未知孰是弟子禪林房阿闍梨覺日作覺

圓坊阿闍梨圓乘卷異本作覺弟子ニ成テ遮那

日坊阿闍梨無圓乘字未知孰是弟子ニ成テ遮那

玉トソ申ケル此下京師本稱十一ノ歳トカヤ母ノ

申事ヲ思出シテ諸家系圖ヲ見ケルニ實モ清和

天皇ヨリ十代御苗裔六孫王ヨリ八代多田滿仲

末葉伊豫入道頼義子八幡太郎義家係六條判官

為義嫡男前左馬頭義朝末子ニテ候也如何モシ

テ平家ヲ滅シ父ノ本望ヲ達セント思ハレケル

コソ懼レケレ晝ハ終日學文ヲ事トシ夜ハ終夜

武藝ヲ誓古セラレタリ僧正谷ニテ天狗ト夜ナ

夜ナ兵法ヲ習ト云々サレハ早足飛越人間ノ業

トハ覺スオホ○京師本云十一歳ニテ家々ノ系圖ヲ覺諸國日

記ナトシ見ル程ニ心賢シク成テ我身ノ有様

ヲ思フニ清和天皇十代ノ末ヲウケ云々世系

書畧為義孫左馬頭義朝カ子ニテ有物ヲ伊豫

殿頼義相摸守ニテ有レ時奥州貞任宗任ヲ攻キ。其功賞ナカリシカハ八幡殿奥州ニ下向レテ。後三年ノ合戦ニ打勝。出羽守ニナラレシ。其時ノ心ニ我モ成テ。父義朝ノ本望ヲ達シ。世ニモ出ハヤトソ思ケル。房主禪林房ニ申ケルハ。毘沙門ノ帯キ給ヘル劔ヲ。少ノ程太刀ヲ設テ取替テ借給ヘトソ申ケル。禪林房有ヘカテサル事也。本尊ノ寶劔也。別當權別當以下ノ大衆ニ此事聞ヘナハ悪カリナント申ケレハ。其後ハ請

サリケリ。隣ノ房ニオトナシキ兒チアリ。語ラヒテ常ハ出行シテ。小太刀打刀ニテ辻切シ。人ヲ逐オモ早ク逃テルモ早シ。築地塀ナト跳超オモ相違ナシ。僧正谷トテ天狗化者ノ栖所ヘ。夜十夜十行テ兵法ヲ習。彼難所ヲモ夜々越テ。貴舟社ニソ請ケル。其振舞凡夫ニハ非ストテ。寺僧等舌ヲ振ケル。云々。花山院左大臣兼御方詳見一人儲タリシガ。スサマラレテ後ハ一盛衰記

條大藏卿長成參議藤忠能子北方ニ成テ子共數多出來
 タリ此渡那王ヲハ蓮忍モ覺日モ出家ニ給ヘト
 云ヘハ兄二人カ法師ニ成タルタニ無念ナルニ
 左右ナクハナラシ兵衛佐申合テナト申サレケ
 リ強テ云ヘハ此下京師本稍異別出于下指違ヘンナト内々モ云
 レケレハ此下京師本稍異別出于下師匠モ常磐モ繼父大藏
 卿モ力及ハス只平家ノ聞ヲノミソ歎カレケル
 或時奥州金商人吉次ト云者劍卷作五條橋次末春京上リ
 ノ次ニハ必鞍馬ヘ參ケルニ逢給ヒテ此童ヲ陸

奥ヘ具シテ下レ由々敷人ヲ知タレハ其悅ニハ
 金ヲ乞テ得サセニスルト宣ヘハ御供仕ラン事
 ハ安事ニテ候ヘ共大衆ノ御答ヤ候ハニスラン
 ト申セハ此童失タリトモ誰カ尋候ヘキ土用ノ
 死人ヲ盗人ノ取タルニヨソ候ハニスレト宣ヘ
 ハ其上ハ仔細候ハシト約束シケルカ但定日ハ
 同道ノ人ノ計ヒニテ候ヘシト申處ニ其人又參
 請セリ遮那王語ヒ寄テ御邊ハ何ノ國ノ何氏ニ
 テニシテスソト細々ト問給ヘハ下總國ノ者ニ

テ候。深栖三郎光重源仲政子。子。陵助頼重舊訛作重頼今

據系圖及岡崎本改之。下倣之。ト申テ。源氏ニテ候ト答ケレハ。サ

テハ左右ナキ人ゴサンナレ。誰ニカ結給ヌ。源三

位頼政トヨソ結候ヘト申セハ。今ハ何ヲカ隠シ

進ラセ侍ヘキ。前左馬頭義朝末子ニテ候。母モ師

匠モ法師ニナレト申サレ候ヘ共。存スル旨侍テ。

今ニテ罷過候ヘ共。始終都ノ住居難義ニ覺候。御

邊具シテ先下總ニテ下給ヘ其ヨリ吉次ヲ具シ

テ奥ヘ通り侍ラント委細ニ語給ヘハ。仔細ナ

シト約諾シテ。生年十六ト申。承安四年三月三日

曉鞍馬ヲ出テ。東路遙ニ思立心程ヨソ悲ケレ義按

經發鞍馬盛衰記其夜鏡宿ニ著夜更テ後手ツカ

ラ髮取上テ。懐ヨリ烏帽子取出シ。ヒタト著テ打

出給ヘハ。陵助早御元服候ケルヤ。御名ハ何ト問

奉レハ。烏帽子親モナケレハ。手ツカラ源九郎義

經トヨソ名乗侍レト答テ。打連給テ

○京師本云。祖父師ノレニヲニモ。師匠禪林モ。悪

ム様ナレトモ。心ノ内ヲ知タル故ニ。内心ニハ

最惜ク思ヒケリ。其比毎年陸奥國へ下リケル
金商人常ニ鞍馬へ参タリ。遮那王カ房ヲ師ト
頼テ有ケルカ。此兒ノ云様。我ヲ奥州ニ具シテ
下レ。ユ、シキ者ヲ一人知タリ。金二三十兩ヲ
請テ取セシト語ヒケレハ。承候ト約束ス。又坂
東武者ノ中ニ諸陵助シケヨリト云者アリ。是
モ鞍馬へ参ケリ。又遮那王語ヒ寄テ。御邊ハ何
方ノ人ソ。下總國ノ者ニテ候。如何ナル人ノ子。
何レノ姓ノ人。名ヲハ何ト云ソトコサカシク

問ハ。深栖三郎光重子ニ陵助重頼。不肖ノ身ニ
テハ候へ共。源家末葉也ト申。サテハ左右ナキ
人ゴサシナシ。誰トカ申承給フ。兵庫頭頼政ト
昵合候ト申。加様ニ尋申事仔細アリ。此童ハ平
治亂ヲ起シテ失ハレ候。左馬頭義朝末子。九條
雜司常磐腹ニ三人候。兄二人ハ法師ニ成ヌ。遮
那王ハ男ニ成ハヤト思フ也。男ニナラハ平家
如何思ハンスランノ憚アリ。御邊連テ下リ給
へ。モノウツテ遊ハント申。伴申テ。兒カドヒト

源氏物語 卷三

三

テ答ラシニスラント陵助申ケレハ。此童失候
トモ我身ノ程ヲ思知ニ心安ニナト云テ打泣
ケレハ。サラハト約束ニテケリ。遮那王十六ト
甲。承安四年三月三日。曉鞍馬寺ヲ出ケリ。世中
ニ怖テ。上ニコソ悪ム由ナレ。内々同宿兒ナト
名残ヲ惜ケリ。其日近江鏡宿ニ著テ。夜半許ニ
髪ヲ我ト剃上。日來懷ニ持ケル刀ヲサシ。常ニ
ガレテサシケリ。烏帽子ノホコリ押拭著タリ。
翌朝出ケルニ。陵助御元服候御烏帽子親ハ誰

ゾ。自ラ御名ハ如何。源九郎義經也。弓矢ナクテ
ハ叶間敷ト有シカハ。征矢一腰。弓一張獻ル。矢
負弓持儘ニト申セハ。自撰騎給ヘル。馬ノ足立
好所ニテハ馳引シ。物打習テソ下ケル云々。
黄瀬河ニ著テ。北條へ寄ラント宣シヲ。父ニテ候
深栖ハ見參ニ入候ヘトモ。頼重ハ不マ々御目ニ
懸候ハス。後日ニ御文ニテヤ仰候ハント申セハ。
直ニ通給ケリ。此下京師本又爰ニ一年許忍テオ
異別出下
ハシケルガ。武勇人ニ勝レテ。山々千強盜ヲ誡給

ノ事。凡夫ノ熊トモ見ヘサリシカハ。雖脱囊ト云
ヘハ始終ハ平家ニヤ聞ヘナント申セハ。サラハ
奥へ通ラントテ。先伊豆ニ越テ兵衛佐殿ニ對面
シ。此由ヲ申テ。若平家聞ナハ。御爲然ルヘカラス。
去ハ奥へ下リ侍ラント宣フニ。佐殿上野國大窪
太郎カ女十三ノ年熊野參ノ次ニ。故殿ノ見參ニ
入下リシカ

○京師本云。深栖消息ニテ此由ヲ申送。兵衛佐返
事ニ。サル者候。相構テ不便ニセサセ給ヘト仰

ケリ。角テ一年許有ケルニ。御曹司野ニ出テ狩
シケルニ。馬盗ノアルヲ。人々擲ント仕ケレト
モ。其長六尺許アル男。大木ヲ後ニ當テ刀ヲ拔。
死狂ニ狂ケル程ニ。召捕者ナシ。増テ近處へ寄
者ナシ。數十人アリケレトモ。持アツカヒケル
ヲ。御曹司彼盗人ノ脇ノ下ニツト寄。刀持タル
臂ヲ。シタ、カニ足ニテ蹴上給フ。刀ヲカラリト
落ス。サテ袴ノ腰ニ取附。中ニ上リテシタ、カ
ニ打附捕。又或時深栖カ家近所ノ百姓ノ家

ニ。盗多ク入タリケルニ。彼御曹司太刀計ニテ
出合。盗六人走入ケルヲ。四人其場ニ切殺シ。二
人ニ手負セテ。我ハ恙モナカリケリ。此事國中
ニ披露セハ。平家ノ聞ヘ悪カリナントテ。深栖
モテ。平ツカフ。其後伊豆國へ越テ兵衛佐ニ對
面ス。義經既ニ長リ候又。世ノ聞ヘ如何ト當國
他國ニテ沙汰シ候也。身ノ事ハ次也。御爲コソ
痛敷存候ヘ。人ノ知サラニ國へ落下。世間ノ様
ヲ見ハヤト忍々ニ申サルレハ。兵衛佐宣ケル

ハ。陸奥ニ大切ニ思候ヘキ者一人アリ。ソレヲ
尋テ下リ給ヘ。上野國大窪太郎カ女。十三ノ年
熊野へ參シ時。故頭殿ニ見參ニ入テ。此後イタ
ラノ男出來候トモ。是嫡子ニシタテ候ヘシ。御
覽シ知セ給ヘト申タリシカハ。父ニ後レテ後。
云々。

父ニ後レテ後。人ノ妻トナラハ。平家ノ者ニハ契
ラシ。京師本云。同シ人ノ妻トナラ。同クハ秀衡
ハ。平侍ノ妻ニハナラシ。云々。同クハ秀衡
子。衡カ妻トナラントテ。女夜逃ニシテ奥へ下ル程

ニ。秀衡カ郎等信夫小大夫小大夫。京師本作小太郎。按系圖名元治。藤師
綱子。稱佐藤ト云者。道ニテ横取シテ。二人ノ子信繼
太信夫。莊司ヲ儲タリ。京師本云。信夫ニ後レテ。二人ノ子
信忠ヲ儲タリ。ヲハ別ニ置。屋敷ナト得テ。云々。今
モ後家分ヲ得テ之シカラテアナルソ

○按東鑑文治五年八月八日條云。泰衡郎從信夫

佐藤莊司又號湯莊司。是繼相具叔父河邊太郎

高經伊賀良目七郎高重等陣于石那坂之上。搦

湟懸入逢隈河水於其中。引柵張石弓。相待討手。

云々。據此則信夫莊司。至文治五年猶存可疑矣。

ソレヲ尋テ行給ヘトテ。文ヲ書テ進ラセラル。郎

與ヘ通り給テ。御文ヲ附給ヘハ。夜ニ入テ對面申。

尼ハ佐藤三郎嗣信系圖東鑑佐藤四郎忠信トテ。

二人ノ子ヲ持テ侍ル。嗣信ハ御用ニハ立進ラス

ヘキ者ナレ共。酒ニ醉ヌレハ少口アラナル者也。

忠信ハ天性極信ノ者也トテ京師本云。尼四郎ヲ

ニオハヒニ。ス佐殿ノ御弟也。相構テカニツキモ

テナニ奉レト細々ト申ケレハ。承候トテ領掌シ。

々。奉リケリ多賀郡ニ越テ郡京師本作郷。按吉次

ニ尋逢。秀衡カ許ヘ具シテ云々ト宣ヘハ。平泉ニ

越テ京師本云。京ヨリ下レル度コトニ女房ニ附
 テ申タリシカハ。即チ入奉リテモテナシカシツキ
 奉ラハ。平家ニ聞ヘテ責有ヘシ。出シ奉ラハ。弓矢
 ノ長キ瑾ナルヘシ。惜ニ進ラセハ天下ノ亂ナル
 ヘシ。兩國ノ間ニハ國司目代ノ外。皆秀衡カ進退
 也。暫忍テオハシマセ。眉目能冠者殿ナシハ。姫持
 タラン者ハ。婿ニモ取奉リ。子ナカラニ人ハ子ニ
 モシ進ラスヘシ。京師本云。御所存ヲ心得テ。始終
 ハ。秀衡カ家僕ニモ漏ト申セハ義經モ角コソ存
 給フヘカラス。云々。

候へ。但金商人ヲスカシテ召具シテ下侍リ。何ニ
 テモ給度候ト宣ケレハ。金三十兩取出シテ商人
 ニコソ取セケレ。此下京師本。説
 詳也。別出下。其時上野國松井
 田ト云所ニ一宿セラレケルニ。家主ノ男ヲ見給
 フニ大剛者ト覺ケレハ。
 ○京師本云。其後信夫へ越テ。常ハ坂東へ越。秩父
 足利三浦鎌倉小山長沼彼等ニ近附テ。爰ニ十
 日彼ニ五日ソ留リケル。好所領持タル者ヲ見
 テハ。奴ヲ撃テ是カ所領ヲ知行シテ。カ附テ本

意ヲ達シ。宿意ヲ遂ハヤト思ヒ。猛勢ナル者ヲ
見テハ。奴ヲ語ヒテ謀反ヲ起サハヤトソ思ヒ
ケル。上野國松井田ト云處ニケブノ亭ニ一夜
宿セラレタリケルニ。主ノ男ヲ見テ。奴カ眼サ
シ。頰ツラ魂タシヒ所存一ツハ有ラニ。彼等ヲ語ヒテ平家
ヲ滅サニ時。旗サレニセハヤト思ヒテ。留ラニ
ト仕給ヘハ。此男申様。此冠者殿。歩カチ跳タシニテ迷ア
リクヘキ人トモ見ヘス。博ウチ弈ナシ打カ盗ヌスカ。吾ヲ子
ラヒテ殺サントスル人カナリトテ追出シケ

力リ。云々。此下。京師本無。而至下段。詳載。
後平家ヲ攻上ラレケル時。語ヒ具ニ給ヘリ。伊勢
國目代ニ連テ上野ニ下ケルカ。女ニ附テ留レル
者ナレハ。伊勢三郎ト召レ。我烏帽エホ子ホ子コノ始ナレ
ハ。義ノ字ヲサカリニセントテ義盛ト附給ヘリ。
堀彌太郎岡崎本云。堀井彌太郎云々。按玉海。東鑑。盛衰記。堀彌太郎名有異同。詳參考盛衰
記ト申ハ。金商人トソ聞ヘケル。按義經出鞍馬。赴奥州。會賴朝及伊
勢義盛事等。見盛衰記第四十六
卷義經始終段。與此甚異。可并見。
賴朝舉義兵。并平家對治事。唯出于京師。岡崎二本。

後平家對治事

去程ニ兵衛佐殿ハ配所ニ於二十一年ノ春秋ヲ

送ラレケルカ。文覺上人ノ覺舊作學今據系圖及諸實錄改之。藤爲長子。

俗名盛遠。元亨釋書作藤持遠子。盛勸ニ依テ。後白

河法皇ノ院宣ヲ賜。按平家物語盛表記亦載僧文

無所見。蓋文覺偽作耳。詳參考盛表記。治承四年八月十七日。和泉判

官兼高隆平信兼子。夜討ニシテヨリ後石橋

山小坪絹笠所々ノ合戰ニ身ヲ全フシテ。安房上

總ノ勢ヲ以テ。下總國ヲ打靡ケ京師本云千葉介

武藏國へ出給ヌレハ。八箇國ニ靡カヌ草木モナ

カリケリ。醍醐惡禪師全濟。八條卿公圓濟モ。此由

聞テ關固タス又前ニト京師本云。笈取テ掛。修行者急

馳下ラレケレハ此下希義誅一節。岡崎本異也。而

東鑑治承四年十月朔日條云。醍醐禪師全成有

光儀被下令旨之由。於京都傳聞之。潛出本寺以

修行之體。下向之由被申之。武衛泣令感其志。給

云々

平家廳テ土左へ流シ、希義ウテト。當國住人蓮

平家廳テ土左へ流シ、希義ウテト。當國住人蓮

池次郎權守家光ニ仰附ラレシカハ家光參テ兵衛佐殿坂東ニテ謀反起サセ給フトテ君ヲ討進ラセヨト飛脚下著候ト申セハイレフ告タリ我毎日父ノ爲ニ法華經ヲ讀誦ス今日イマ夕讀終ラス暫相待トテ持佛堂ニ入御經ニ卷讀終テ京師本無ニ腹搔切テ失給フ以上希義誅一節岡崎本與東鑑同按系圖治承四年年頼朝初起平家命蓮池權守家綱殺希義家綱告希義希義自殺傳首京師又按盛衰記平家物語不載希義始末唯平家物語長門本載希義誅爲治承四年事東鑑爲壽永元年事各異也出下可并考

○平家物語長門本云十二月朔日按前後文乃土治承四年也

左國流人フク田ノ冠者希義ヲ誅セラハ彼希義ハ故左馬頭義朝四男頼朝一腹一生ノ弟也去永曆元年當國ニ流サレテ年月ヲ送ケル程ニ關東ニ謀反起リケレハ同意ノ疑ニテ彼國住人蓮池次郎キヨツ子ニ仰テ誅セラレニケリ云々

○東鑑壽永元年九月二十五日條云土佐冠者希義者武衛弟也母季範女去永曆元年依故左典廐縁坐配流于當國介良莊處近年武衛於東國舉義

兵給之間。稱有合力疑。可誅希義由。平家加下知。仍故小松内府家人蓮池權守家綱。平田太郎俊遠。爲顯功。擬襲希義。希義日來與夜須七郎行家土州住人依有約諾之旨。辭介良城。向夜須莊。于時家綱俊遠等。追到于吾河郡。年越山。誅希義。訖云々。

○東鑑又云。文治元年三月二十七日。土佐國介良莊住侶琳猷上人。參上于關東。是有功于源家者也。去壽永元年。武衛舍弟土佐冠者希義。於彼國爲蓮池權守家綱被討取之時。欲曝死骸於遐邇。

爰土人之中。自雖有存忠之輩。怖平家後聞。不及葬禮。沙汰。而此上人。以往日師壇垣田鄉内。點墓所。訪沒後。未怠。又取幽靈鬢髮。今度則懸頸所參向也。屬于走湯山住僧良覺。申子細之間。武衛有御對面。以上人之光臨。用凶塊再來。由被盡芳讚云々。

九郎御曹司ハ秀衡力許ニオハシケルカ。佐殿既ニ義兵ヲ舉給フト聞ヘシカハ。打立給フニ。秀衡緝地錦直垂ニ紅下濃鎧紅京師本作紫金作太刀ヲ添テ

奉ル馬ハ御用ニ隨テ召ルヘシトソ申ケル京師本云

御馬ハイカ程ト申セハ。黒馬ノ八寸許ナルヲ始

トシテ。十二匹立タル中ヨリ撰取テ金覆輪鞍置

テ乘。應テ信夫ニ越給ヘハ。佐藤三郎ハ公私取認

テ參ラントテ留リ。弟四郎ハ即御供ス。早白河關

固テケレハ。那須湯詣ノ料トテ通給フ以下義經來干頼朝

陣岡崎本異也。與東鑑全同。今不抹

○京師本云。白河關固テケレハ。那須湯ト云山路

ニ懸リテ通給フ。金商人本ハ京家ノ青侍身貧

ニシテ爲方ナサニ始テ商人ト成テケルカ。今

度九郎冠者ニ附テ又侍ニ成シ。窪彌太郎トソ

申ケル。伊勢三郎ト申ハ。本ハ伊勢國住人也。上

野松井田ニ住シテ。家中饒ナル者也。義經忍テ

彼カ許ニオハレマス。恐テ追出シタリシ者

也。彼カ許ニ著テ。先年是ニ在シ時ハヨモ知シ。

源九郎義經トハ吾事也ト名乗給ヘハ。様有人

ト見奉リシカ違サリケル者トテ。御供申サ

ントテ供奉シケリ。云々
兵衛佐殿ハ。大庭野ニ十萬餘騎ニテ陣取テオハ

シケル所へ。究竟ノ兵百騎許ニテ參給フ。佐殿何者ソト問給へハ。源九郎義經ト名乗マシメセハ

○京師本云。義經百騎許。白旗サ、セテ參タリ。何者ソ左右ナク錦直垂ヲ著。白旗ヲサ、セタル事心得スト宜へハ。源九郎義經ト名乗。是程成人スル迄見サリケル事ヨトテ

按京師本前云。義經既會頼朝。今自相。予看。昔ヲヤ思出サレケニ涙クミ給フ。云々昔八幡殿。後三年ノ合戰ノ時。弟義光刑部丞ニテオハシケルカ。絃袋ヲ陣ノ座ニ留メテ。金澤城へ

馳下給ケルヲコソ。故入道殿頼ノ二度活給タル様ニ覺ユレトテ。鎧ノ袖ヲヌラサレケルトコソ承レト頻ニ悅給ケリ

按義經至頼朝陣詳東鑑今出盛衰記不載于此岡崎本此下具載清盛歷官及薨遺言等與公卿補任東鑑無異故不採甲斐源氏武田一條小笠原逸見板垣賀々美次郎秋山淺利伊澤等駿河目代廣政ヲ討テケレハ

按東鑑駿河目代橋遠茂也東鑑說出于下可并考

○京師本云。一條武田小笠原甲斐國ヨリ打テ赴ク。カノ目代廣政其勢幾程モナカリケレトモ

平家ニ志深クシテ。一千餘騎馳聚。甲斐源氏三千餘騎ヲ二手ニ分テ。中ニ取籠攻ケレハ。目代コラヘス討レケリ。云々

○東鑑治承四年十月朔日、條云、甲斐國源氏等相具精兵、競來之由。風聞于駿河國、仍當國、目代橋遠茂、催遠江駿河兩國之軍士、儲于興津之邊、云々。於石橋合戰之時、令分散之輩、今日多以參向于武衛鷺沼御旅館云々。十四日、條又云、午、尅武田安田人々、經神野并春田路、到鉢田邊、駿河目

代率多勢赴甲州之處、不意相逢于此所、境連山峯道時磐石之間、不得進於前、不得退於後、而信光主相具景廉等進先登兵法、勵力攻戰、遠茂暫時雖迴防禦之構、遂長田入道子息二人梟首、遠茂爲囚人、從軍失壽、被疵者不知其負、列後之輩不能發矢、悉以逃亾、酉、尅梟彼首於富士野傍伊堤之邊云々

平家ノ大將小松權亮少將維盛

内大臣平重盛子

其勢五萬餘騎

ニテ富士河ノハ夕ニ

京師本云富士川西岸神原ニ陣ヲ取

陣ヲ取賴朝ハ

足柄箱根ヲ打越テ。黄瀬河ニ著給フ。其勢二十萬騎也。京師

本云。頼朝二萬騎。合戦ハ明日ト定ケルニ。富士川ノ沼ニ居ケル水鳥云々。平家ノ兵ノ中ニ齊藤

別當實盛源氏夜討ニヤシ候ハニスラント申ケル。夜富

士河ノ沼ニ下居ケル水鳥トモ。軍勢ニ恐テ飛立ケル羽

音ニ驚テ。矢ノ一ツモ射スシテ都へ逃テ上リケリ。以上甲斐源氏

攻駿河。目代至此。岡崎本詳載其始末。又與東鑑同。畧之。養和元年三月ニ平家又墨俣

ニテ支ヘタリ。卿公圓濟義圓ト改名シタリケルカ。淡入

シテ討レテケリ。岡崎本詳載義圓戰死其文與東鑑全同。今畧之。

○京師本云。十郎藏人行家ハ源為義子一門ノ長者タ

ルヘキト高倉宮ノ諱以仁。後白河帝皇子令旨ニハ成レ

シカ共。頼朝ト義仲ト二人ノ姪共ニ權ヲ取レ。

僅ニ五百餘騎ニテ墨俣川ノ東ノ岸ニ扣タリ。

八條卿公圓濟ハ親ノ敵ノ平家ヲ川ノ向ニ永

々ト置テ。合戦ヲセスシテアラハ。人ノ壽命千

萬夜ノ間モ死タラハ。後生ノ障ナルヘシト云

々。我ニ從輩五十騎許。川ヲ渡シ大勢ノ中

へ懸入。平家ノ大將頭。中將重衡平清盛子能登。守教

經平教盛子此大勢ニ取籠ラレ。卿公圓濟討レケリ。

云々

醍醐惡禪師ハ後有職ニ任テ駿河阿闍梨ト云レ
力僧綱ニ轉シテ後有職云々至阿野法橋トソ呼此岡崎本無
レケル醍醐惡禪師云々京師本不載岡崎本具載
全成謀反及誅與東鑑全同而云全成年四
十四者非也系圖有異又恐
非也系圖東鑑共見于下

○系圖云惡禪師全成於奈良得度住遠江阿野因
號阿野禪師建保中北條義時命金窪右衛門等
誅云々

○東鑑建仁三年五月十九日條云阿野法橋全成
依有謀反之聞被召籠御所中武田五郎信光虜

之即被預于宇都宮四郎兵衛尉云々二十五日條
又云阿野法橋全成配常陸國六月二十三日條
又云八田知家奉仰於下野國誅阿野法橋云々
壽永二年七月二十五日北陸道ヲ攻上リケル木
曾義仲先都へ入ト聞へレカハ平家ハ西海ニ赴才年
給フサレ共池殿ノ君達ハ皆都ニ留リ給フ其故
ハ兵衛佐鎌倉ヨリ故尼御前ヲ見奉ルト存候へ
レト京師本云内々起請息度々申サレケレハ落オチ
留給ヒケリ本領少モ相違大ク安堵セラレケレ

ハ京師本云其外所領昔ノ芳志ヲ報給フトソ覺

ヘシ壽永二年云々至此岡崎本不載去程ニ長田四郎忠宗ハ平

家ノ侍共ニモ憎マレシカハ西國ヘモ参ラス角

テハ懸テ國人共討レシトヤ思ヒケシ父子十騎

京師本作許羽ヲ垂テ鎌倉殿ヘソ参ケルイシウ

五十騎實平平参タリトテ土肥次郎宗平子ニ預ラレケルカ範

頼義經二人ノ舍弟ヲ差上セラレケル時長田父

子ヲモ相添給フトテ身ヲ全シテ合戦ノ忠節ヲ

致セ毒藥變シテ甘露トナルト云事アレハ勲功

アラハ大ナル恩賞ヲ行フヘシトソ約束シ給ヒ

ケル時長田云々至此京師本無然レハ木曾ヲ退治シ平家ノ

城攝州一谷ヲ攻落ス註進ノ度コトニ忠宗景宗

ハ軍スルカト問給フニ又ナキ剛者ニテ候向フ

敵ヲ討當ル所ヲ破ラスト云事ナシト申セハ八

島城落タリト聞ヘシ時今ハレヤツ親子ニ軍セ

サセソ討セントテト宣ケルカ軍果テ土肥ニ具

シテ歸参ケレハ今度ノ舉動神妙也ト聞ユ約束

ノ勸賞取スルソ相構テ頭殿ノ御孝養能々申セ

成綱ニ仰含フタタルソト有シカハ喜テ罷出タルヲ彌

三小次郎彌三。京師本作野上。按東鑑有野三刑部

野上共押寄テ長田父子ヲ擗捕磔ニコソセラレ

ケレ。磔ニモ直ニハ非ス。頭殿御墓前ニ左右ノ手

足ヲ以テ竿ヲ尋カセ。土ニ板ヲ敷テ土磔ト云物

ニシテナフリ殺ニソセラレケル。京師本云左右

ニテ板ニ打著。凡ヲハナシ。面ノ皮ヲ剥。四五日平

家ノ方ヘモ落行ス。サラハ城ニモ引籠矢ノ一ツヲ

モ射スシテ身命ヲ捨テ軍シテホシカラヌ恩賞

哉。是モ只不義ノ致ス所。業報ノ果ス故也。トソ人

々申ケル。又何者カシタリケン

嫌ヘトモ命ノ程ハ壹岐守。ミノオハリヲハ今ソ給ハル

カリトリシ鎌田カ首ノ報ニヤ。懸ル憂目ヲ今ハ見ルラン

ト讀テ。作者ニ鎌田政家ト書タル高札ヲコソ立

タリケレ。是ヲ見ル者コトニ哀トハイハテ唇ヲ

返シテ惡マヌ者ソナカリケル。サレハ武道ニ血

氣勇者仁義勇者ト云事アリ。如何ニモ仁義勇者

ヲ本トス。忠宗景宗モ隨分血氣勇者ニテ拔群ノ

者ナリシカ共。仁義ナキカ故ニ譜代ノ主君討奉
 リテ。終ニ我身ヲ滅シケリ。平家方云々至爰ニ池
 殿ノ侍丹波、藤三國弘ト名乗テ鎌倉ヘ参タリシ
 カハ。我モ尋度思ツレトモ。公私ノ忿劇ニ思忌シ。
 今ニ無沙汰也トテ即對面シ。只今納殿ニアラニ
 物皆取出ヨト下知シ給ヒケレハ金銀絹布色々
 ノ物共ヲ山ノ如クニ積上タリ。是ハ先時ニ取テ
 ノ引出物也。訴訟ハ此上舊有脱誤。今依岡崎本改之ナキカト問
 給ヘハ。丹波國細野ト申所ハ。相傳ノ私領ニテ侍

ル由申セハ。聽テ御下文賜テケリ。財寶ヲ宿次ニ
此上舊有誤字。今依岡崎本訂之送レトテ都迄ソ持送ケル。
 ○京師本云。丹波藤藏鎌倉ヘ参タリ。イニフモ参
 タル者哉。頼朝ニ向テノ芳恩身ニ餘ル人也。其
 上池殿ノ功臣ニテ。旁大事ニ存スル客人也。引
 出物セハヤト仰ケレハ。近習ノ輩納戸ヲ開テ。
 豹虎皮トヲ鷲羽トヲ鷹羽トヲ其外鎧腹卷太刀長刀腰刀數
 ヲ知ス。ヨリカ又按前既作丹波藤カ前後ニ積
 ヲ知ス。ヨリカ又三國弘今齟齬ヨリカト宣ヘハ
 ヲ知ス。ヨリカ又許也訴訟ハナキカト宣ヘハ

テ。院中ノ御雙六ニ常ニ召レ。院モ御覽セララルナレハ。君ノ召仕ハセ給ハン者ヲハ。争カ呼下スヘキト思テ斟酌スル也ト語給へハ。此由源五ニ告タリシカ共。天性雙六ニ嗜タル上。院中へ参入ヲ思出トヤ存ケン。終ニ下ラサリケリ

○京師本云。髮ヲ惜マセシ源五ニ。イマタ恩ヲ返サヌソ。心ニ懸ルト齋院次官親能ニ仰ケレハ。親能盛安ハ雙六ノ上手ニテ。常ニ院ノ御所へ召候者ニテ候ト申ケレハ。サテハ私ノ召ニハ

召候者ニテ候ト申ケレハ。サテハ私ノ召ニハ

如何トテ召レヌ。親能此由鎌倉殿ノ御所存候
ト申上セケレハ。夜晝雙六ノ隙ナシトテ下向
セヌ云々

九郎判官ハ梶原平三カ

按系圖。姓平氏。或作景長。子。或景清。子。凡世系紛々

不一。無所考證。讒言ニ依テ都ノ住居難儀ナリシカハ。又

奥州ニ下リ。秀衡ヲ憑テ過サレケルカ。秀衡力一

期ノ後 岡崎本云。秀衡年六十六歲。系圖云秀衡文治四年十二月二十二日卒。九十二歲。按東

鑑。秀衡卒在文治三年十月二十九日。而。不。曰。壽幾。系圖卒年恐誤矣。鎌倉殿ヨリ泰

衡ヲスカシテ判官ヲ討セ。後ニ泰衡ヲモ滅サレ

ケルコソ懼シケレ

以上岡崎本具載義經出處事。迹及泰衡滅。與東鑑無異。今

之。カクテ日本國殘所ナク打從へ給テ建久元年

十一月七日 七日。據公卿補任。東鑑等是賴朝入洛。日也。京師本作十七日非也。岡崎本作

十月三日。是發鎌倉日也。岡崎本又載二十五日賴朝詣義朝墓。及宿青墓。太炊家。共與東鑑同。故畧之。

始テ京上セラレケルニ。近江國千松原ト云所ニ

著セ給ヒ。淺井北郡ノ老翁ヲ尋テルニ。二人ハ

老者ヲ以テ參ル

○京師本云千松原ニ著給テ所ニ。瘦衰タル老翁

同體ナル婆引具ニテ參タリ。大勢ノ中ヲカキ

ワケカキワケ参ル。如何ナル者ソ狼藉也ト申
 ○也ハ君ハ知シ召候ナニ。参ルヘキ者ナレハト
 云テ御前ニ参タリ。汝ハ何者ソト御尋アレハ。昔
 君ノ暫マシ侍シ。北郡淺井ノ老翁ト婆ニテ
 候。今マテ候ヲ悔敷思候ツルニ。唯今君ノ御上
 洛ヲ拜申コソ。有難ク嬉シクマテ参候ト申ケレ
 ハ。事ハ繁シ思忌タリ。イシフモ参タリ。云々
 土瓶ニヲ持参セリ。アレハ如何ト問給ヘハ。君ノ
 昔キコシメサレシ濁酒也ト申セハ。誠ニ廿八事

有トテ三度傾テ。汝子ハナキカト仰ケレハ。候ト
 テ奉ル。即召具セラレケルカ。足立カ子ニ成レテ。
 足立新三郎清恒トテ。近習ノ者ニテアリケル也
 京師本云。子一人。在シヲ進ラセヨト仰ケレハ。具
 ニテ参ケルヲ。近江冠者トテ召仕ハル。足達新三
 郎キヨツ子カ事也。云々。按東鑑盛衰記。平家物語。
 安達新三郎者。壽永元曆文治之際。既奉事頼朝。此
 云建久元年。頼朝初召見清恒者。可サテ此老翁ニ
 疑耳。盛衰記。清恒或作清經。不一。
 引出物也ヨト仰有シカハ。白鞍置タル馬ニ匹色
 々ノ重寶入タル長持二合ソ賜ケル。京師本云。白
 二匹。絹小袖入タル。又昔ノ鶺鴒ヲ召出シテ。小平
 長持三合賜云々。

ヲ聽テ賜ケリ。入洛有シカハ入洛上岡崎本有十月七日字而云同九日院即院參シ給タルニ。法皇モ往事思召出テ。殊ニ哀ケニコソ見ヘサセオハシケレ岡崎本具載頼朝除目等及從士十人任官等悉同東鑑畧之鬚切ト云太刀清盛カ許ニ有シヲ。御守ノ爲トテ院ニ名置レタリシヲ。今度頼朝ニ賜ケリ。青地錦ノ袋ニ入ラレタリ。三度拜シテ賜ケルトナニ。此太刀ニ附テ數多ノ説アリ。頼朝卿關原ニテ囚ハレ給ヒシ時。隨身セラレタリシカハ。清盛ノ手ニ渡テ院ヘ參ケリト。云々。又或

説ニハ。今ノハ眞コトノ鬚切ニハ非ス。實ノ太刀ハ以前ヨリ青墓大炊カ許ヨリ進ラセケルナリ。其故ハ兵衛佐大炊ニ預ラレケルヲ。頼朝囚人ト成給ヒシ時。此太刀ヲ尋ラレケルニ。今ハ隱シテモ何カセントヤ思ハレケニ。有ノ儘ニ申サレケリ。即大炊カ許ニ尋ラレケルニ。源氏重代ヲ平家方ヘ渡サニスル事コソ悲シケレ。兵衛佐コソ斬ナレ給フ共。義朝ノ君達多ケレハ。ヨモ跡ハ絶タ給ハシ。先隱シテ見ント思ケレハ。泉水トテ同程ナル太刀

有ケルヲ拔替テ進ラスル。髭切ハ柄鞘圓作也。定
テ佐殿ニ見セ進ラセラルヘシ。佐殿ワラハト一
心ニ成テ。仔細ナシト宣ハ、本ヨリノ事也。若是
ニ非スト申サレハ。女人事ニテ侍ヘハ。取違候ケ
リト申サシニ。苦シカラシト思案シテ。泉水ヲ上
セケル也。難波六郎經家請取テ上リケルヲ。應テ
頼朝ニ見セ奉リテ。是カト問レケルニ。アラヌ太
刀トハ思ハレケレ共。長者カ心ヲ推量シテ。ソナ
ル由ヲソ申サレケル。清盛大ニ悅テ秘藏セラレ

ケルヨ院へ召レケル也。眞ノ髭切ハ先年大炊カ
方ヨリ進ラセケルト云々。此太刀ニ附テ數多說
云々至此京師本無。按
此所載或說乃與諸本說同。諸本說既出于頼朝被
生捕段。劔卷又有異說。既載本書第二卷尾。可并見
此。下岡崎本具載。後白河崩。及建久中。源範頼幽于
伊豆之事。與東鑑同。而云。其後ツ井ニ彼所ニシ
テ誅セラレケルトナシ。云々。按東鑑不載誅範頼
保曆間記。建久四年八月範頼誅云々。未知所據。
其京上人度盛安ヲ召テ様々ノ重寶ヲ賜リ。京師
本云
馬物具太刀長刀縮小袖。數ラ盡シテ賜鎌倉ヘ如
參ラサルニヨリ御恩ハナシ。サテ建久云々。如
何今ニテ下ラサリケルソ。大莊ヲモ賜リタケレ
共折節闕所ナシ。然ルヘキ所アラハ賜ヘキトソ

宣ケル。誠ニ今ニテ參ラサル條私ナラヌトハ申
ナカ。不義ノ至。併微運ノ至極也トソ。盛安モ申
ケル。建久三年三月十三日。後白河院崩御ナリ
カハ。應テ盛安鎌倉ヘソ參ケル。頼朝對面ニ給
テ。最前モ下向シタリ也ハ。然ルヘキ所ヲモ賜ハ
ニスルニ。今迄遲參コソカナキ次第ナレ。小所ナ
レ共先馬飼トテ多記莊半分ヲ賜ケル。由緒ノ
由申ケルニヤ。美濃國上中村ト云所ヲモ同賜テ
ケリ。

○京師本云。美濃國多記莊半分ヲ賜。守康妻モ尾
張野間ノ者ノ女也。故義朝討レシ時討死シタ
リケル。鷲栖玄光カ後家也。一兩年後ニ守康ニ
嫁シタリ。夫婦トモニ奉公ノ忠節ナレハトテ。
美濃上中村ヲ賜云々。按。本書諸本。義朝遭害之
時。玄光金王共遁。今京師
本云。玄光戰
死者。相鬪。齧ス
建久九年十二月貢馬ノ次テニ。京師本云。建久九
年十二月下旬。鎌
倉殿守康ヲ召テ明年云々。按。明年正月十五日。過
京師本此。說不穩。恐有訛差。
ハ急キ下ルヘシ。多記莊ヲハ一圓ニ賜ヘシト仰

遣升レケルニ

此間岡崎本載頼朝疾病之由見于下

明ル正治

正舊誤作

承今元年正月十三日

據公卿補任十五日

鎌倉殿

御年五十三ニテ失給ヒケリ

○岡崎本云同此稻毛重成入道

小山田有重子

亡妻追善

ノ爲ニ相摸川橋ヲ建立ス此亡妻ハ頼朝御

臺所ノ御妹北條遠江守時政女也同

按建久九年十

二月二十七日橋供養アリ是ニ依テ結縁ノ爲

ニ將軍家相向給フ處ニ御歸路ニ及テ馬ヨリ

落病ヲ受明ル正治元年正月十一日病惱重

ラセ給フニ依テ御出家同十三日鎌倉御所ニ

シテ薨逝云々

○保曆間記云建久九年冬大將殿

頼朝相摸河橋供

養ニ出テ還ラセ給ヒケルニ八的原ト云所ニ

テ亡カレシ源氏義廣義經行家已下人々現シ

テ頼朝ニ目ヲ見合タリ是ヲハ打過給ヒケル

ニ稻村崎ニテ海上ニ十歳許ナル童子ノ現シ

給ヒテ汝ヲ此程隨分ウラナヒツルニ今コソ

見附タレ我ヲハ誰トカ見ル西海ニ沈ニ安德

天皇也トテ失給ヌ。其後鎌倉へ入給ヒテ。即病
 ツキ給ヒケリ。次年正月十三日終ニ失給フ云々
 ○按東鑑建曆二年二月二十八日條云。相模國相
 摸河橋數箇間朽損可被加修理之由。義村申之
 如。相州廣元朝臣善信有群議去。建久九年重成
 法師新造之。遂供養之日。為結緣之故。將軍家渡
 御。及還路有御落馬。不經幾程。薨給畢。重成法師
 又逢殃。旁非吉事。今更強雖不有再興。何事之有
 哉。之趣。一同之旨申御前之處。仰云。故將軍薨御

者。執武家權柄二十年。令極官位給後。御事也。重
 成法師者。依己之不義。蒙天絕歟。全非橋建立之
 過。此上一切不可稱不吉。有彼橋為二所御參詣
 要路。無民庶往反之煩。其利非一。不顛倒以前。早
 可加修復之旨被仰出云々
 源五是ヲモ知ス。十六日京ヲ立テ馳下ル程ニ。三
 河國ニテ早此事ヲ聞レカ共。ワサトモ下ルヘキ
 身ナレハ。鎌倉ニ下著レテ。身人不運ナル由語ケ
 ル程ニ。是ヲモ知ス云々 昔ノ夢想ノ不思議ナト
至此。京師本無

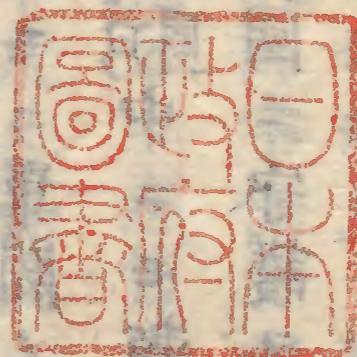
卷三

申ケレハ齋院次官親能中原廣其鮑ノ尾ヲ即食
 トタニ見タラハ猶目出タカラニ賜テ懷中セ
 計ナレハニヤ殘所アルトソ申サレケル云々
此間作者評清盛赦賴朝義經死終至子孫滅亡一節今除之京師本終于此義朝ハ鳥羽
 院御宇保安四年癸卯年生三十四歳ニシテ保元
 元年ニ忠節ヲ致シ勲功ヲ蒙リ朝恩ニ浴シケル
 今度ノ謀反ニ與シテ身ヲ滅ホボシキ然レトモ賴朝
 義經二人ノ子有テ兵衛佐三十四判官二十二歳
 ニシテ義兵ヲ舉會誓ノ恥ヲ雪キ二度家ヲ榮カ

シ給ヘリ賴朝ハ近衛院久安三年丁卯年誕生ス
 義經ハ二條院平治元年己卯年生レタレハ三人
 トモニ單闕ノ年ノ人也單闕舊訛作草閉今據岡崎本改之按爾雅太歲在
卯日中ニモ賴朝平家ヲ亡シ天下ヲ治テ文治始
 諸國ニ守護ヲ居テアラユル所ノ莊園郷保ニ地
 頭ヲ補シテ武士ノ輩ヲ勇メ廢タル家ヲ起シ絶
 タル跡ヲ繼テ武家棟梁トナリ征夷將軍ノ院宣
 ヲ蒙レリ卯ハ是東方三支ノ中ノ正方トシテ仲春ヲ
 ツカサトル柳ハ卯ノ木也春ノ陽氣ヲ得テ天道

參平治物語卷第三

惠ノ眉ヲ開キ。營繁ク榮レハ。柳營ノ職ニハ。卯年ノ人ハ實ニ便有ケル者哉。



參考平治物語卷第三終

嚮我

相公命臣

弘濟

校讎保元平治物

語及盛衰記太平記諸本并存

異同旁搜羣書以為修史之助

弘濟

未終功而歿再命臣

貞顯

重校焉

元祿己巳之冬書成共冠以參考二

字但恐採撫未博疑惑尚多姑

長文

克明館藏書

藏之館備他日之考身

水戶府下内藤貞顯謹識



武江書肆富野治右衛門勝武
元祿六癸酉年十一月十三日 壽梓
京兆書林茨城多左衛門方道

克明館
文庫印

